

はじめに

今回で先生シリーズも一五巻になった。

一年に一冊のペースだから、一五巻というのと、ちょっと長いぞ。

四〇歳の人だったら五五歳になる。……これはイマイチ驚きがない。

五歳だった子どもが二〇歳はたちの成人になる。これはすごい。

このようなセリフは以前書いた記憶がある。もうやめよう。

以前書いたセリフ、たとえば、以前、「バイオ・おそうじロボット」のことを書いたことがあった。

なんとオサムシの仲間だろうと思われる虫が研究室の床のこまごまとしたゴミを後ろ足にからめとって球状にして移動していたのだ。このオサムシを「バイオ・おそうじロボット」第一号とすれば、なんと、今回**バイオ・おそうじロボット第二号**が現われたのだ。私は、うれしく

てうれしくてしかたなかった（うれしかった理由は……、まーあとでおわかりになるだろう）。

さて、**何かが始まった**たら、それは、たいてい、**いつかは終わる**。

喜びが始まったたら、たいてい、いつかは終わる。**苦しみが始まった**ら（結構きつい、辛い苦しみもあるが）、たいてい、いつかは終わる。そんな繰り返しなのなかで人は生きているのだし、生きることも自体にも始まりと終わりがある。

それは、モモジロコウモリをめぐる今回の事件でも同じだ。

「大げさなことを言ったあとに、モモジロコウモリの事件かよ」とは思わないでいただきたい。イヤ、思っていただけでも結構だ。

でもまー、とにかく、**モモジロコウモリが大変だった**のだ。モモジロコウモリが……。

ところで読者のみなさんは、朝、職場（学校）に来たら、前の日に、じゃあねさよなら（相手がコウモリだから、夜、帰り際に、**じゃあねおやすみ、と言ってはならない**。コウモリにと

つては、おはよう、なのだ。でも私、つまりホモ・サピエンスのことも考慮してほしいので、おはようとは言えない。だからまし、無難なところで、さよならと言うのだ」と言って別れたコウモリが、飼育容器（一・三メートル×〇・六メートル×高さ〇・六メートルの大きな水槽）から姿を消していた！という経験をされたことはおありだろうか？

私は、……………ある。

いつもは、私が帰るとき、蓋を開け、飼育容器内に餌を置いてから声をかけ、蓋をもどしてドアを出るのだが、**その日は、「飛翔の日」だった。**

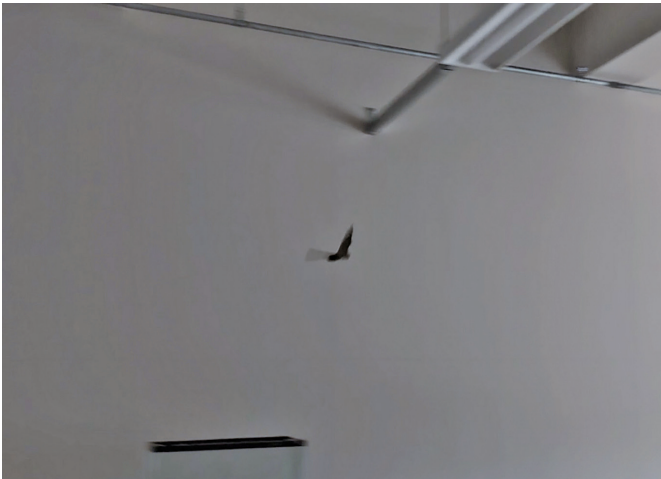
モモジロコウモリたちは飼育容器のなかで飛翔することもでき、パタパタ飛ぶのだが、そうは言っても、実験期間が終わって自然に返したとき、飛翔のための筋肉が十分維持されていないといけないので、週に一度か二度、広い実験室内を自由に、長時間はばたかせている。それが「飛翔の日」であり、その日がそうだったのだ。

最後は、虫取り網で空中捕獲して、**ギヤーギヤー不平を言うコウモリたち**を飼育容器にもど

し、餌を置き、水を替えてやり、じゃあさよなら、と声をかけた。問題は**そのあとだ**。**ちょうどそのとき**、電話がかかってきたのだ。

電話でちょっと長い話をしたあと、なんと私は、「よし終わった、帰ろう」と思ってしまったらしいのだ。つまり**蓋のことを忘れてしまっていたのだ**。きつと疲れがたまっていたのだらう。

次の日の朝、実験室に行って、蓋がされていないことに気づき、**私はあわてた**。あわてて、飼育容器のなかの、いつも四匹のクモリたちがたまって休息している場所（レンガの間やクモリ用巣箱のなか）



「飛翔の日」に実験室内を自由に飛びまわるモモジロクモリ。実験が終わって自然に帰ったときのための筋肉維持トレーニングだ

を、おそるおそる調べてみたのだが**コウモリたちは消えていた**。当然だろう。

でも私くらい動物行動学者になると、そこからの行動が違う。モモジロコウモリは洞窟性コウモリだから、飛びまわったあと、実験室の天井や壁面で休息している可能性がある。そうならんで、天井や窓に下げてあるブラインドカーテンを探していった。

するとどうだろう。ちゃんというではないか。天井にくっつきあって二匹（モモジロコウモリは日本のコウモリのなかで二番目に小さなコウモリなので、広い天井の隅に大きめのシミのように見えた）。そしてブラインドにへばりつくようにして一匹。

天井のコウモリたちは虫取り網で確保した。ブラインドのコウモリは、枝から果実をもぎとるようにして確保した。

よし、この調子でもう一匹いれば私のミスは帳消しになる。ごまかしには自信がある私は、楽観的だった。

一時間ほど過ぎるまでは。

いない、いない、どこにもいない。洞窟の天井、壁面。説はもうかなぐり捨てて床も含め

て探しに探したのだが、どこにも見つかることはできなかった。このままだと未発見のモモジロコウモリは**干からびて死んでしまう**。それはかわいそうだ。あどけない顔が脳に浮かんだ。

苦しみはもう始まっていた。

暗雲立ちこめる思いを胸に、さてどうしたものか。実験室に隣接する研究室にもどり、長椅子に身を横たえて目を閉じた。

しばらく時間が過ぎたころだった。研究室のドアがノックされた。力なく「どうぞ」と迎えると、それは隣の研究室のT先生のゼミ生たちだった（T先生は南極周辺の深海の調査で、長期間、研究室を留守にしており、ゼミ生は、研究室を含め実験に必要な部屋や機材は規則を守



今回の騒動はこのモモジロコウモリ。逃げ出した4匹のうちの1匹がどうしても見つからない

はじめに

ったうえで使用が許可されていた)。

話を聞くと、なんでも、研究室で電子顕微鏡を見ていたら、**どこからかコウモリが現われて**、今、床を這っている、ということだった。どうしたらいいでしょうか、と聞くのである (T先生の出張中、何かあったら私が相談にのることになっていった)。

私は急いでT先生の研究室に行った。

確かにコウモリが床を這っていた。急いでつかんで顔を見ると、元氣そうだった。

私は、その**学生たちとコウモリを抱きしめた**気持ちになった。

そのときのモモジロコウモリが下の写真である。



T先生の研究室の床で保護されたバイオ・おそうじロボット第2号。右手にたくさんの綿状のゴミクズを、左手には、お亡くなりになったダンゴムシも見える

その姿を見て、私の脳のなかにある言葉が浮かんできた。それが、……：「**バイオ・おそろじロボット**」**第二号**だ。

第一号は、前述のオサムシの仲間だった。第一号は、私に綿状のゴミを渡したあと、あっという間に私の手から脱出して、また旅立っていった。研究室のなかを歩きまわって、部屋の隅っこの細かいゴミを足にくっつけて掃除をしてくれるのだ。一方、第二号は、**もう「おそろじ」はしなくていい**。協力してもらっている実験が終わったら、もとの洞窟へもどしてやる。

ゼミ生たちにお礼を言い、私の研究室に連れ帰って、燃料として、ガソリンや電気のかわりに水とミールワームを与えた。喉が渴いていたのだろう。水をよく飲んだ。

この調子で実験も頑張ってくれよ。私は頭と背中をなでてやりながらしみじみそう思ったのだった。

そうして、**一つの苦しみは、あわただしく姿を消した。**

さて、「バイオ・おそろじロボット」第二号の話はこのあたりで終わりにし、本書の「はじめ」も終わりにしよう。

読者のみなさんは、お元気で過ごさじだろうか。

毎年、なにかしら大変なことが起こる、それが人生だろうが、特に、昨年（二〇二〇年）は大変な年だった。「生物学概論」という授業の始まりのとき、私は「不安や苦しみは、空気と同じで、生きることに必要なもの、生きることそのものだ」と言った。そしたら、授業後の感想で、「（その言葉が）心に染みて救われました」と書いてくれた学生がいた。

いろんなことがあった一年だったし、それは今でも続いている。

読者のみなさんが、「不安や苦しみ」はあっても、お元気で毎日を過ごされていることを、過ごされるようになることをお祈りしたい。

一五巻（一五回）ともなれば、そんなセリフを正直に言っても場違いではないだろう。

追伸……………みたいな感じ。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の発生源としてコウモリが疑われている。それが正しいかどうかは不明であるが、少なくとも生物学者は次のように考えている。

ヒトが、生きるために必要な酸素や水の供給、適度な気温や湿度の維持といった、ヒトの生

命維持装置とも言える生態系を自らの手で破壊していることにヒト自身が気づいてもう久しい。破壊行為の一つが、自然のなかへの生活の場の拡大だが、その拡大が、それまで接したことがなかった生物との出会いをもたらしただ。そして、それがエボラウイルス病やCOVID-19をはじめとしたヒトに有害な感染症を生み出している。

私は、動物たちの行動や生態が知りたい、そして同時にそれを生息地の保全に結びつきたい。そう思って大学で動物を飼育することも多い（もちろん鳥獣類については捕獲・飼育許可を取ってだ）。その一つが「バイオ・おそうじロボット」第二号のモモジロコウモリである。

私は、小さな島国である日本には、ヒトが足を踏み入れたことがない自然はもうないと言ってもいいと思っている。大陸の状況とは違うのだ。

ただし、在来ウイルスが変異することもあるだろうし、外来種とともに、あるいは外来種として入ってくるウイルスもいるはずであり、ペットとしての動物にしても在来種としての動物にしても、ふれあったあとは手洗いや場合によっては消毒などの配慮が必要だろう。「一日のうち少しでも野生生物との『交流』をもたないと体調が悪くなる」（プロフィールより）私も気をつけている。

はじめに

あなたに言われたくない、と思われる方もおられるかもしれないが（いや確実にいるだろう）、読者の方も気をつけていただきたい。

二〇二二年一月三十一日

小林朋道